

No.456
2021年
11月1日
(月)

つ く し ん ぼ

11月号
(霜月)

読書の秋はいかがですか？

校舎裏のイチョウやモミジが色づき始めました。今年も鮮やかな紅葉を見ることができそうです。一方で夕方の指導室は、薄暗く寒くなってきました。子ども達がさみしく感じないように元気いっぱい頑張ります。11月は、学習発表会がありますね。体全体を使って「ことば」伝える場です。「ことばの教室」に通って来ている子ども達にとって、不安な行事かもしれません。「ことばがうまくでないかも…」という不安は、想像するより大きいものだと思います。おうちの人や先生、友だちの理解が、その子の自信につながります。今回は「吃音」に関する本を紹介し、ことばの教室だけでなく、図書館にも置いてありますので、一度お読みいただけたらと思います。



『ことばがすらすらでないんだ』

吃音について学んだことがある人は、吃音のある人に「最後まで聞かよ」「話し方より内容を聞いているよ」とメッセージを送っています。吃音に対する誤解がたくさんあることを教えてくれる一冊です。



『ぼくは川のように話す』

吃音に、たんなる吃音というものではなく、それはことばと音と体がからみ合った、とても個人的な苦勞の塊です。なめらかな話し方であればいいのに、と思います。でも、そうになったら、それは、ぼくではありません。



『るいちゃんのけっこんしき』

大事な友達の結婚式に、自分のことばで「おめでとう」を伝えたい。一生懸命練習したのに、スピーチでどもってしまった、あや。涙を流すあやにるいちゃんがかけたことばとはー。作者の奥さんの体験からできた、絵本です。



『まーるごとでよろしく!』

友だちや担任の先生、ことばの教室の先生、家族の支えで、つまってしまうことも全部含めて、「まーるごとで私なんだ」と思えるようになった、りんちゃん。そして、自分が大切だと思えるようになりました。インクルーシブ教育はまるごと受け止めることから始まります。



『ジャガーとのやくそく』

「じぶんの声を見つけれたら、ぼくがかわりに君たちの声を伝えるよ。」動物園のジャガーと約束した少年は、吃音を克服し動物学者になる。世界で初めてジャガーの保護区を作ったラビンヴィッツさんのノンフィクション絵本です。



『きつおんガール』

社会福祉士となった著者が、吃音で苦しむ人に向け、自身が吃音で悩んだ経験を漫画化。吃音を『障害』にしてしまうのは、環境の影響が本当に大きい」と著者は言います。悩んでしまう原因は、あなたのせいではなく、教養のない周囲の人たちの心ない言動なのです。

「ありのままの話し方で自信を持って話せるように」、おうちの方、先生方の接し方がとてもとても大切です。もちろん、吃音があるなしに関わらず、子ども達への接し方は重要です。①話をじっくり聞く②頭から否定しない③選択する機会を与える④どうしたいのかたずねる⑤大人の意見を押しつけない⑥子ども自身の成長を伝えること。それができるのは、今、ここで、子ども達と向かい合っている私たちしかいないのです。



新見市手をつなぐ育成会講演会
発達支援が必要な子どもと家族の理解と支援
～切れ目ない支援の実現に向けて～

おかやま発達障害者支援センター 主幹 **今出大輔** 氏

令和3年11月13日(土) 市役所南庁舎3階 大会議室
 開場 13:00
 講演会 13:30~15:00

